

## 懐かしい唱歌・童謡に関する歴史の思い出を辿る

長岡 壽男\*

大阪青山学園監事

### Reminiscing on the history of shoka and douyo

Hisao NAGAOKA

Osaka Aoyama Gakuen

**Summary** Shoka is a song composed in Japan from the Meiji Period to the end of World War II for the music education of children in elementary school. Douyo is a song for children composed by poets and musicians with new movement in the Taisho Era (1912 to 1926). These songs are very familiar to Japanese people who have sung them since their childhood. For this study, ten songs were selected and traced. Some songs were eliminated from authorized music textbooks after World War II because they were influenced by militarism. However, many of the songs have been sung since the Meiji Period.

Tracing the history of a song shows its close relationship with world movement and culture even if it is only a children's song.

It also reveals the efforts of those writing the lyrics and composing the songs.

**Keywords:** Shoka and douyo, Learning about European and American music, Movement promoting of children's songs in the Taisho Era, Influence of World War II, Democracy after World War II

## 1. はじめに

人は幼少の頃から、わらべ歌、唱歌、童謡などに触れる機会が多々あったかと思われる。子どもの頃、遊び仲間が歌っている歌を、いつの間にか覚えてしまったこともあった。また、幼稚園や小学校で習った歌もある。さらに、兄や姉などが家で歌っていたのを、真似をして覚えたこともあった。

このようにして、幼少の頃に知った歌ではあるが、子どもの頃は、歌うことのみに集中しており、この歌にどのような想いが込められているのか全く無関心であった。また、誰が作詞し、作曲したのは誰なのか、およそ無頓着であった。歌の内容についても、深く考えることもなく過ぎていたように思う。

しかし、その後の思いがけない出来事や経験から、懐かしい子どもの歌について断片的な知識を得る機会があった。こうした体験を踏まえて、幼少期に覚えた

唱歌や童謡について、それぞれの歌における生誕の経緯（歌に取り上げられた主人公の人生を含む）、時代の背景、社会の変遷との関係など、全般的な見直しを行い、どのようなことがいえるのか本稿において整理しようとするものである。

ところで、唱歌と童謡は、その生成過程が異なっている。唱歌は、第二次大戦前の尋常小学校や高等小学校の教科の一つで、現在の音楽に当たるものである。明治時代において、欧米の音楽を我が国の学校音楽として取り入れるべく、当時の文部省が伊澤修二<sup>(1)</sup>などに学ばせていた。その後、設けられた音楽取調掛の協力により、教育体制の整備や唱歌集の編集が進められた。なお、当初は、欧米音楽に日本語の詩を付けた唱歌も生まれている。やがて、日本人により作詞・作曲された唱歌も組み込まれるようになり、なかには今日に至るまで歌われている名曲もある。その後、文部省唱歌集のほか各種の教科書や副読本も生まれてお

---

\*Email: hisao@sakura.zaq.jp  
〒562-0046 箕面市桜ヶ丘2-6-3

り、音楽教育の形も一層整ってきた。しかし、1941年の国民学校令の施行により、唱歌は芸能科音楽として引き継がれている。さらに、太平洋戦争の終戦により、戦後は、民主主義の時代に沿った検定教科書として、内容が改められることになった。

一方、童謡は、唱歌の教条的なところを見直す必要があるとして、大正時代に子供の自由な心を開放しようとする願いのもとに、童謡運動が進められたことに始まる。この中心的役割を担っていた鈴木三重吉の雑誌「赤い鳥」に掲載された童謡詩「かなりや」が、曲の付いた最初の童謡となった。それ以降、詩情豊かな名曲が次々と生まれている。これは、優れた詩人と作曲家による密接な連携があったからといえよう。しかし、その後の戦争の激化とともに、軟弱な歌とみなされたものについては、軍により封じられることもあった。

ところで、今回取り上げた唱歌・童謡は、多くの曲の中から合計10曲を選んでいる。それぞれの作品のうち8曲は、どのような経緯があって生まれたのか、制作にかかわった人（主に作詞者の苦労や人生を中心に述べた）や作品の歴史などに触れている。なお、軍神讃歌と徳目唱歌の2曲については、国の意向を受けて作られたものであり、歌の主人公について考察している。

本稿の構成は、2.において、取り上げた唱歌・童謡について概観する。3.において、個々の作品について考察している。4.において、全体のまとめと併せて歴史的な流れを整理している。

なお、本稿で参考にした文献について、文末にその一覧を記している。

## 2. 本稿で取り上げた唱歌・童謡について

本稿で取り上げた唱歌・童謡については、以下の表1に整理している。

唱歌の4曲の内訳は、まず「お正月」である。子どもの時から歌ってきた懐かしい曲であり、今も歌い継がれている。「故郷」も音楽会でしばしば演奏されており、合唱曲としても歌われることが多い。故郷を思う気持ちは誰にもあり、折に触れて歌われる名曲の一つといえる。これらの歌に関った人たちの歴史を辿ってみる。

一方、当時の軍国主義や教育体系の中で組み込まれていた2曲（唱歌3および4）は、戦後の教科書からはすでに削除されているが、ただ単に葬り去るのではなく、当時取り上げられた歌の主人公について、どのような意義があったのか、それぞれの人物と歴史について、改めて考察してみる。

また、童謡については、大正時代から始まった童謡運動の展開の中で生まれた名曲のうち4曲（童謡1～4）をまず取り上げた。誰もが知っている名曲であるが、世に出るまでの作詞者たちの苦労の様子や、協力者の姿などに触れている。

さらに、懐かしい昭和時代の風物がテーマになった2曲（童謡5および6）を選んでいる。このうち「たきび」は、戦時体制下にあって、軍部から封じられるという運命を辿っていた。しかし、戦後、日の目を見ることになった。また、「めだかの学校」は、空襲を逃れるため疎開していた作詞者が、戦後になって、当時の思い出を歌にした名曲である。

表1. 本稿で取り上げた唱歌・童謡の一覧

区分	曲名	作詞者	作曲者	作成年	備考
唱歌1	お正月	東くめ	滝廉太郎	明治34年	幼稚園唱歌
同上2	故郷	高野辰之	岡野貞一	大正3年	唱歌の傑作
同上3	水師營の会見	佐々木信綱	岡野貞一	明治43年	軍神讃歌
同上4	二宮金次郎	作詞者不詳	作曲者不詳	明治44年	徳目唱歌
童謡1	かなりや	西條八十	成田為三	大正8年	最初の童謡曲
同上2	あの町この町	野口雨情	中山晋平	大正14年	子どもの想い
同上3	からたちの花	北原白秋	山田耕筰	大正15年	名曲の一つ
同上4	赤とんぼ	三木露風	山田耕筰	昭和2年	同上
同上5	たきび	巽聖歌	渡辺茂	昭和16年	昭和の思い出
同上6	めだかの学校	茶木滋	中田喜直	昭和26年	同上

### 3. 唱歌・童謡の歴史を辿る

取り上げた曲について、どのような歴史があり、どのような経緯や意図があって作られたのか、個々に述べてみたい。

なお、それぞれの曲について、曲名の次に「歌い出しの一節」を記している。唱歌と童謡の8曲は竹内喜久雄（2017）を参考にした。「水師營の会見」と「二宮金次郎」は野ばら社編集部（2000）を参考している。

#### 3-1. 唱歌の歴史を辿る

##### 3-1-1. 東くめの作詞した「お正月」：（もういくつ寝ると お正月）

東くめ（1877-1969）は、和歌山県新宮市の出身であるが、夫の東基吉が当時池田師範学校（現大阪教育大学）の校長であったことから、池田市に住んでいたことがある。阪急池田駅から徒歩7～8分の地に住居があった（現在は他人の住居）。この関係で、近くの五月山公園に記念碑がある（写真1）。



写真1. 東くめ記念碑（於五月山公園・池田市）  
（注：側面にハトボツポの歌詞が、彫られている）

基吉が、言文一致の作品を普及させるべく、教育者の立場から務めていたことから、くめは、その趣旨に沿って詞を作り、東京音楽学校（現東京芸術大学）二年後輩の滝廉太郎（1879～1903）に作曲を依頼したものの一つが、この「お正月」である。

東くめは、大阪の川口居留地にあったミッション・スクール、ウィルミナ女学校（現大阪女学院）を経て、東京音楽学校の選科から専修部を卒業している。

その後、東京府立第一高等女学校（現都立白鷗高校の前身）の音楽教師をしていた。一方、東基吉は、和歌山師範学校卒業後（1894年）、東京高等師範学校に入学し、卒業後（1899年）、東京女子師範学校の教授や付属幼稚園の批評掛を兼務していた。この間くめと結婚している。幼稚園唱歌の在り方について、妻くめの協力を得ていたことが、口語体の歌詞による唱歌の誕生となった<sup>(2)</sup>。このように歴史的にも意義のある曲となったが、子どもの頃は何も知らずに、この「お正月」を歌っていたことになる。

なお、基吉は岩手県師範学校主事を経て、東京高等師範学校の助教授兼付属幼稚園批評掛に赴任している。その後、宮崎県、栃木県、三重県の師範学校校長を歴任後、大阪府の池田師範学校の校長となり、この池田市が最後の赴任地となった。長男の東貞一（元大阪音楽大学教授）は、父基吉のことを「明治前期の欧米直輸入的な幼児教育思想および幼児文化思想を、大正期に花開いた自由主義的・児童中心的な方向に、一歩ないし数歩前進させた指導者」と評価している<sup>(3)</sup>。

ところで、「お正月」が、どうして子どもたちに人気のある曲であるかを解く鍵は、その時代の環境に依存しているところが大い。とくに太平洋戦争末期から戦後にかけては、物のない厳しい時代が続いた。それだけにお正月だけは、子どもたちにとって、ささやかではあるが、お餅が食べられるとか、お年玉がいただけるなどの喜びがあり、待ち遠しいものがあったといえる。

今では都会に広場が少なくなり、交通事情もあって<sup>たこあ</sup>風揚げ、羽根つきの風景を目にすることは珍しくなっている。しかし、戦後の都会には、空襲による焼け跡や爆弾池などがあり、当時はそうした付近で夢中になって風揚げをしたものである。栄養失調気味の子どもの<sup>はな</sup>多く、涙をたらしながらも、袖で拭いて懸命に風揚げをしていた仲間の光景を思い出す。戦前・戦後期に育ったものとして、現在の豊かさを羨ましくは思うが、当時は貧しくはあったものの、人々の気持ちは暖かく、楽しく遊んだ風景が今も思い出される。

なお、作曲者が滝廉太郎であることを、知っている人は少ない。彼が小学校低学年の頃、父の仕事の関係で、富山に居たことがあった。このことを記念して、富山城跡のお濠を遊覧船で巡る「松川茶屋」の一室に、滝廉太郎に関する資料室がある。滝廉太郎といえば、竹田にある岡城が、名曲のイメージにつながっているという人が多い。しかし、富山においても、子どもの時の思い出やイメージが、その後の名曲に影響を与え



たという人がいる（松村直行（2019）p.166）。滝廉太郎は、結核により23歳で亡くなったが、東くめは91歳まで元気で長寿を全うした。

### 3-1-2. 高野辰之作詞の「故郷」：（兎追いしかの山）

高野辰之（1876-1947）は現長野県中野市の出身である。作曲家として有名な中山晋平も、同郷といえる。高野が東京音楽学校の教授を務めていた頃、中山を教えたこともあったという（和田登（2010）p.56）。高野は、明治初期の音楽教育を進めるにあたり、音楽取調掛<sup>(4)</sup>として唱歌の作詞にも務めていた。作曲家岡野貞一（1878-1941）<sup>(5)</sup>とのコンビで、「日の丸の旗」、「紅葉」、「春が来た」、「春の小川」、「故郷」、「朧月夜」という名曲を作っている（当初は作詞者・作曲者不詳で発表された。金田一春彦（2015）p.94 参照）。

この「故郷」は、音楽会における演奏曲目の一つとして演じられることが多いが、時にはアンコール曲として、取り上げられることもある。さらに、日本人だけでなくウィーン少年合唱団やイル・ディーボ（IL DIVO）<sup>(6)</sup>などの演奏曲目にも組入れられている。

ところで、高野は妻と結婚するにあたり、妻の母から条件として「将来故郷に錦を飾れる人間になるなら」との誓いを交わしていた。「故郷」の歌詞三番の中にも、「志を果たして、いつの日にか帰らん」とあるが、歌詞にその想いを込めているといわれている<sup>(7)</sup>。妻の実家は、飯山市にある真宗寺（写真2）であるが、島崎藤村は小説「破戒」のなかで、「蓮華寺」としてこの寺のことを描いているとみられた。宗派からみても小説の中の蓮華寺は、この真宗寺であると推定できるが、「この寺の住職は女癖が悪い」という趣旨の文章を書いていることから、寺や檀家から異議が出された。双方による論争となったが、藤村は、この小説はフィクションであり、真実を描いたものではないと取り合



写真2. 真宗寺（於長野県飯山市）

わなかった。このことから、二人の間には確執<sup>かくしつ</sup>が残ったとされる<sup>(8)</sup>。

なお、飯山の真宗寺を最近訪れたが、この寺が藤村の「破戒」で描かれている「蓮華寺」であるとして、寺内に記念碑が設置されていた。時が流れ、代が変わって、現在では、むしろこの寺が小説で取り上げられたことを誇りに思っているのではないかとの印象を受けた。

中野市にある高野辰之の記念館をも訪れたが（写真3）、北陸新幹線の飯山駅からタクシーで巡った。途中には田畑が広がっており、詞の中にある兎を追うことや小鮒を釣るなどといった原風景は、今も残されているように思われた。その当時、故郷を離れて都会に住む人々にとっては、懐かしい山や川を想起させる歌となったであろう。なお、高野は、後に「日本歌謡史」、「江戸文学史」、「日本演劇史」の三大著作をあらわし、近代国文学において大きな功績を残している。このことから、東京帝国大学より大正14年に文学博士の学位を授与された。



写真3. 高野辰之記念館（於長野県飯山市）

このように、高野は、音楽取調掛、東京音楽学校教授などを務めながら、唱歌の編集、制作に携わってきた。個人としても岡野貞一とのコンビで多くの名曲を生み出している。さらに、研究者として博士号を取得するなど、明治・大正時代の音楽教育界において、偉大な足跡を残したことになる。

### 3-1-3. 乃木希典と「水師営の会見」：（旅順開城約なりて）

この唱歌は、乃木希典（1849-1912）が日露戦争終結に当たって、ロシア軍将軍と会見する模様を歌ったものである。当時の小学生（または国民学校生）は、ロシアとの戦いにおいて二百三高地などの戦場で勝利

した乃木将軍のことを、誰もが知っている存在であった。また、戦前の教育を受けた子どもたちは、お国のために戦ったとされる日本軍のことを、尊ぶとともに誇りに思っていた。

ところで、旅順での戦いの現場としては、旅順港口、二百三高地<sup>(9)</sup>、東鶏冠山などが挙げられる<sup>(10)</sup>。また、この歌にある水師營の会見場所も近くにあった(写真4)。なかでも、唱歌「広瀬中佐」は、有名であった。旅順港口封鎖作戦を遂行中に、杉野兵曹長が不明となった。部下のことを探していた広瀬に敵弾が当たり、戦死したことを伝える唱歌であった。



写真4. 水師營会見場所（於中国・旅順近郊）

一方、二百三高地は、ロシア軍要塞のうちでも、旅順港を守るための重要なものの一つとされていた。これを攻め落とせば、日本軍にとって旅順港に停泊するロシア艦隊を攻撃するうえで、格好の場所と考えられた。しかし、この作戦の遂行は多大の損失と犠牲を被る結果となった。このほか、東鶏冠山でも激烈な戦闘が続けられて、敵・味方双方において多くの死傷者を出したが、その現場が今も残されている。日本の勝利により、戦いの終結に際して、両軍の将軍たちが集い(写真5)、休戦の約束を結んだ場所が水師營にあるが、この場所は、元は現地の百姓家であったとされる。

この会見模様を歌った唱歌「水師營の会見」は、歌人・国文学者の佐々木信綱(1872-1963)が、直接乃木大将に会って作詞したとされ、作曲は岡野貞一である。会見場所の庭に棗の木<sup>なつめ</sup>があり、歌詞にもなっている。かつて長府にある乃木の生家を訪れたが、この庭にも棗の木が植えられていた。これは、乃木にとって、日露戦争での勝利の記念と併せて、二児を戦死させた鎮魂の想いも込められているように思われた。

ところで、今なぜ「水師營の会見」を取り上げたかという、筆者の中学・高校時代には、日本史の教科



写真5. 水師營会見時の出席者（会見場所内掲示）

において日清・日露戦争とこれに続く戦争について学習することはなかった。明治維新後の国策について学ぶところで教科は打ち切りとなり、大学の入学試験にも戦争について出題されることは無かった。筆者がこうした戦争について学んだのは、社会人になってから司馬遼太郎の「坂の上の雲」などを読み、独自に理解したことになる。乃木希典についても、吉村昭(1990)、古川薫(1996)、渡辺淳一(1988)、日下公人(2013)を読み、その人物についての理解を深めた。しかし、現在では、高校の授業で、それぞれの戦争について詳しく解説がなされており、我々の時代とは異なっているといえる。

日本は、永遠に戦争を放棄したが、そのことから太平洋戦争後、平和な時代が今も続いている。さらに、戦争の悲惨なことを伝える活動も各方面で行われている。「過去と現在を学び、幸せな未来に結びつける」という言葉があるが、私たちにとっても過去の経験や知識を学ぶことから、平和な将来につなげていくことが何よりも求められている。この意味から、乃木将軍や日露戦争について、知識として知っておくことは大事であるとの思いから取り上げたものである。

### 3-1-4. 唱歌「二宮金次郎」：(柴刈り縄ない草鞋<sup>わらじ</sup>をつくり)

この歌も、今や教科書より削除されている。しかも、この歌を承知している人も少なくなってしまった。作者不詳(作詞・作曲)の典型的な当時の徳目唱歌の一つといえる。

ところで、二宮金次郎(1787-1856)のことを調べていくうちに、立派な農政家であり、苦学力行した生涯の姿は、世間の模範として讃えられて当然と思うようになった。

JR 小田原駅から小田急線に乗り換えて、三つ目の



富水駅にて下車、徒歩約15分程度で、二宮金次郎旧宅と記念館にたどり着いた。ところで、私たちが国民学校（現小学校）在学時代は校門の近くに天皇・皇后の御真影を奉納する奉安殿があり、その近くに二宮金次郎の像もあった。登校時に双方に最敬礼をして、その後各クラスに分かれていったものである。その当時は、偉い人だというだけで、具体的なことは何も知らずに過ごしていた。戦時中に、銅像は軍の要請で献納されたが、石像は手をつけられることはなかった。このため、戦前から存在する歴史のある小学校には、今日でも二宮金次郎の石像は存在している（写真6）。



写真6. 二宮金次郎の石像（於箕面小学校）

しかし、戦後に設立された小学校には、二宮金次郎の碑または石像は見られない。二宮金次郎についての評価やとらえ方は、現在の人々の間では、個人差があると思われる。戦前は、徳目唱歌として、国民が彼の生き方を学ぶべしとして、金次郎は生きていくための手本とされた。親を尊敬し孝行すること、兄弟仲良くかつ面倒を見ること、寸暇を惜しんで勉強することなど、この唱歌を通じて、当時の国民に努めるべき道を教え込んだ。

戦後になり、民主主義の時代となって、国民全員が同じ考えでよいのかという見方が広がってきた。現在では、一律の教育ではなく、各人の能力や個性を存分に発揮させるための教育が求められている。

金次郎の生家は、酒匂川さかわの氾濫により流されて貧困を極めていた。父母が早く亡くなり、彼は祖父の下で暮らしたが、成長して実家を再興し、周囲の村の興隆にも手を貸すようになった。さらに実学を基に、切磋琢磨せつさたくまして地域社会の立て直しに貢献したことが評

価されて、その後、藩や多くの農地の再興にも実績を残している。

この金次郎については、立像にあるように背中に薪を背負い、歩きながら読書する姿が一般的である。ある人は、現在このようなスタイルでは、子どもの教育には不適であるという。自動車が走る時代に、歩きながら勉強することをモデルにするならば、歩行中に携帯端末をさわることと同じである。勉学スタイルを変更することが、危険回避に必要であるとの意見がある。

しかし、金次郎の偉さは、唱歌や石像に込められた姿だけでは、その一部を表現しているに過ぎない。実践を通じて農地の開発や豊かな農村への指導など、偉大な功績を残したことを忘れてはならない（写真7）。関東を中心に六百余村の復興を手掛けたが、私有資産は持たずに、資産のすべては、農村復興のために投入している。金次郎の報徳の教えは、勤労、分度（身分相応に暮らす）、推譲（世の中のために尽くす）の三大徳目といわれる<sup>(11)</sup>。



写真7. 回村中の金次郎（於記念館）

この金次郎の思想は、多くの後継者に受け継がれた。たとえば、岡田良一郎<sup>(12)</sup>は報徳社を起し、農事指導者を育成した。彼の二人の子どもは、後に文部大臣および宮内大臣にそれぞれなるなど、世の中のために尽くしている<sup>(13)</sup>。また、二宮金次郎の教えを受けて、大江市松<sup>(14)</sup>により設立された報徳学園がある。この学園は、すでに100年以上の歴史があり、高校スポーツ界において、多くの業績を残していることも付記しておきたい。

なお、金次郎は晩年には、尊徳の名を用いていたが、正式名は「たかのり」であった。しかし、人々には「そんとく」として広く伝わっている。

### 3-2. 懐かしい童謡の名曲を辿る

#### 3-2-1. 西條八十作詞の「かなりや」：(唄を忘れたかなりや金糸雀は)

西條八十(1892-1970)は、早稲田大学文学部を卒業し、詩人として活躍した。大正期の鈴木三重吉の童謡運動に参画し、彼の作詞した「かなりや」が、成田為三(1893-1945)<sup>(15)</sup>の作曲により、最初の童謡曲となった。西條は「かなりや」のほか、「お山の大將」、「肩たたき」、「毬と殿様」など次々にヒット曲を出したが、このため、北原白秋、野口雨情とともに三大童謡作家などと評価されるようになった。

しかし、西條は、童謡だけでなく、歌謡曲の作詞家としても、多大な業績を残しており、この時代の第一人者との評価がある。主なる歌謡曲には、「東京行進曲」、「東京音頭」、「旅の夜風」、「誰か故郷を想わざる」、「蘇州夜曲」があり、軍歌には「空の勇士」、「同期の桜」、「若鷺の歌」がある。戦後においても、「越後獅子の歌」、「トンコ節」、「青い山脈」、「王将」など、それぞれの時代のヒット曲となった。

西條は、もともと豊かな家に育ったが、父の家業が行き詰まり、家族を支えるために苦勞をした時代があった。大学での評価を得て、フランスに留学することになり、このことが詩人として、また学者として独り立ちできる契機となったと考えられる。

また、他人の実力を評価できる人でもあった。大学での先輩でもあり、詩作について高い評価をしていた野口雨情が、生活に苦勞しており水戸でくすぶっていた。西條は、このことを見かねて、早稲田詩社の仲間を動かし、東京での活動の場を紹介している。これが契機となって、雨情は多くの作品を次々に発表し有名になった。

このほか、金子みすゞ(1903-1930)が「赤い鳥」に寄稿する詩について、選者であった西條が高い評価を与えていた。この当時、金子は、下関にある親戚筋の本屋で仕事を手伝っていた。たまたま、西條が九州へ講演旅行に行く途上、下関に立ち寄り、駅で数分金子みすゞと立ち話をしている<sup>(16)</sup>。これが結果として、金子との最後の別れとなった。彼女は、主人の放蕩に心を痛めており、当時夫との離婚を考えていた。夫から性病を遷されて、絶望の果てに、この後自死したことになる。

かつて山口県長門の仙崎にある金子の生家を訪れたが、この時代の金子みすゞの生活環境に思いを馳せることができた。実の弟である上山雅輔(1905-1989)の作詞した「お使いは自転車に乗って」の記念碑が、

同じ生家内に建っており、二人が実の姉弟であったことを知った。みすゞが結婚するにあたり、弟は大反対であった<sup>(17)</sup>。

ところで、この「かなりや」は、西條個人にとって、父の急死、兄の放蕩、財産の散逸などの結果、生活苦に苛まれている時代の心境を反映している歌とされる。詩人を志しながらも、存分に力を注ぐことのできない時代の自分の姿が、歌を忘れたかなりやに投影されている。しかし、鈴木三重吉が、手を差し伸べたことから、発表の場を与えられた結果、この「かなりや」が日本の童謡に曲が付いた最初となった。さらに、この曲が世間の好評を得ることとなり、一躍有名になったとされる<sup>(18)</sup>。

なお、西條八十の碑が、JR 新宿駅東口前の広場にある(写真8)。周囲の環境の所為もあるが、こんな所にあるのかと不思議に思われた。



写真 8. 西條八十の記念碑(於新宿東口広場)

#### 3-2-2. 野口雨情作詞の「あの町この町」：(あの町この町 日が暮れる)

野口雨情(1882~1945)は、本名栄吉、父量平・母テルの長男として、茨城県、磯原で生まれている。父は廻船問屋を営むとともに、村長をも務めるなど、地元の名士であり、雨情は豊かな家庭で育てられたといえる。孫の野口不二子によれば、野口家は南北朝時代に南朝の後醍醐天皇に忠誠を誓った楠木正成の弟正季から始まる由緒ある家系である。湊川の戦いに北朝が擁立する足利尊氏に敗れて、楠木一族は、現在の豊田市野口村に落ち延びている。追手の詮議が厳しく、身を隠すために地名と同じ野口姓を名乗るようになった。さらに、楠木の族孫が常陸にいることから茨城県



の磯原に居を移している。後に楠木氏の出自であることが分かり、水戸藩の郷士となって家系はつながっている<sup>(19)</sup>。

雨情は、小学校を終えて、叔父の住む東京に出て、東京数学院中学に入り、早稲田大学の前身東京専門学校高等予科文学科に進学した。この叔父勝一は、政治家として活躍し、衆議院議員を三期務めていた。その長男茂吉は、雨情の一歳下で東京帝国大学に進み、雨情と兄弟のように気の合う間柄であった。この叔父勝一が亡くなり、茂吉は22歳でアメリカにわたるが、その後、様子は分からなくなっていた。雨情の童謡「赤い靴」は、アメリカに渡った従兄弟のことが、イメージとして詞に反映されているのではないかとされている。一方、横浜から外国に渡ったとされる女の子の悲しい足跡を調べて、歌の想いを確認した人もいる<sup>(20)</sup>。

早稲田大学に進んだ雨情は、近代文学のリーダーとして偉大な業績を残した坪内逍遙の影響を受け、詩作にも励んでいた。逍遙は、詩人野口雨情の進路を決定づけた重要な人物であったと考えられる。なお、当時、早稲田には北原白秋、三木露風、小川未明などが学んでおり、学友からも大きな刺激を受けていたと思われる。しかし、雨情は早稲田を中退し、詩人としての活動を始めていた。ところが、父量平が急死し、海上輸送から陸上輸送へと時代が変化するなかで、野口家においては大きな借財を抱え込んでいたことになる。このため、雨情は文学への想いを断ち切り、長男として家の再興に励むことになった。

郷里に帰ったところ、人の紹介により、旧家で知られる喜連川藩士族の高塩家から、嫁を迎えることになった。しかし、生活は苦しく、これを補うために、雨情は報知新聞の樺太通信員となるほか、北海道にある新聞社の学芸記者として、単身赴任をしている。北海道の新聞社を渡り歩くなかで、この間に石川啄木との交遊を深めている。ただし、生活は一向に改善せず、しかも生まれた長女を間もなく亡くしている。この時の想いが、後に発表した童謡「シャボン玉」となった。亡くした子どもの幸せを祈って書いたものと言われている<sup>(21)</sup>。

雨情が、地方で埋もれているころ、かつての早稲田時代の仲間が、それぞれ世に知られるようになっていた。およそ10年のブランクがあったが、西條八十は、雨情の才能を評価しており、「金の船」の創刊者斎藤佐次郎に紹介したことから、雨情は中央詩壇での活躍の機会が与えられることになった。雨情は、「四丁目の犬」などの名作を次々に発表した。また、童謡では

ないが「船頭小唄」が中山晋平(1887-1952)<sup>(22)</sup>の作曲により、世に出たことから、一気に雨情の名を世間に知らしめることになった。

なお、雨情は、本居長与とのコンビで「十五夜お月さん」、「七つの子」、「青い目の人形」、「赤い靴」といった名曲を次々に発表している。本居長与の娘みどり・喜美子・若葉が、各地で雨情の童謡を歌い、これが童謡を全国に広める契機となった。また、中山晋平とのコンビでも、「シャボン玉」、「あの町この町」、「兎のダンス」、「証城寺の狸囃子<sup>たぬきばやし</sup>」、「波浮の港<sup>はぶ</sup>」などの名曲が生まれた。

「あの町この町」は、日暮れになって遊び疲れた子どもたちが、揃ってお家に帰らなければならない寂寥感<sup>せきりょうかん</sup>が漂っており、日本の名歌の一つである。子ども時代に誰もが感じ、味わった想いが、この曲に結びついているように思われる。

なお、雨情の多年住んでいた旧宅が、井之頭公園に移設されており(写真9)、付近に住む詩人たちの集いに利用されていた。また、歌碑も同公園内に敷設されている。



写真9. 野口雨情旧宅(於井之頭公園)

### 3-2-3. 北原白秋作詞の「からたちの花」：(からたちの花が咲いたよ)

北原白秋(本名隆吉)(1885-1942)は、福岡県柳川市で北原長太郎・シゲとの間の次男として生まれた。ただし、長男は夭折したことから、事実上長男として遇された。北原家は、代々柳河藩の御用達として海産物問屋を営んでいた。父の代になり酒造業を主とするようになった。したがって、幼少の頃は何不自由のない生活を送っていたことになる(写真10)。

白秋は、高等小学校から県立伝習館中学に入学し、短歌の投稿や詩作に励んでいた。この頃、生家近くの大工宅から火災が発生し、類焼したために、白秋宅の





写真 10. 北原白秋生家（於柳川市）

酒蔵も炎上消失してしまった。保管していた新酒なども商品価値を失くしたことから、その後、一家没落の悲運に見舞われている。しかし、白秋は向学心に燃えており、父の反対を押し切って早稲田大学英文科予科に進学している。早稲田時代は順調に勉学を続けており、早くから詩人として名声を高めていたことになる。

学友には、若山牧水をはじめ土岐善麿、三木露風などがいた。学内だけでなく、新詩社にも参加し、与謝野寛、与謝野晶子、木下杢太郎、石川啄木、吉井勇らの同人とも親しく交わっている。こうした人々との交流を通じて、研鑽<sup>けんさん</sup>を続けていたが、明治40年に五人連れ九州旅行（五足の靴）を行っている。キリシタン遺跡を訪ねたことから、その後の南蛮文学に触れる契機ともなっている<sup>(23)</sup>。明治42年の白秋の処女詩集「邪宗門」は、多くの反響と絶賛を浴びることになり、室生犀星、石川啄木は賞賛の言葉を伝えている。当時「パンの会」という、パリにあるカフェ文芸美術運動のように、詩人と美術家とが連携する会が、日本でも生まれている。この会でも石井柏亭、木下杢太郎、吉井勇、高村光太郎などとの意見交換の場が生まれた。

しかし、実家においては火災の影響から立ち直ることができず、酒造業の倒産から、借金を背負うなど長男としての責任が肩にかかるようになった。白秋は、「言葉の魔術師」などと称されて、詩人としてあまりにも有名であるが、生涯を振り返ってみると、必ずしも順風満帆<sup>じゅんぷうまんぱん</sup>の人生とは言えなかった。

白秋の小田原時代の秘書でもあった詩人藪田義雄は、「随筆 北原白秋」のなかで、三人の夫人について記している。二人とは生別し、三人目の夫人との間に、二人の子どもに恵まれている。最初の夫人俊子とは、隣家の人妻であったことから、その恋愛が姦通罪<sup>かんつうざい</sup>に問われ告訴された。その後、示談<sup>じだん</sup>が成立し、二人は結婚したが、翌年離婚している。藪田によると、その

後、俊子は幾度か姓を変えており、幸福な人生ではなかったのではないかと記している。二度目の夫人章子は、小田原時代に離婚している。夫人の出自は名門の家であったが、生涯は波瀾の連続で、悲惨な末路を終えている。離婚後20年経って、お詫<sup>わ</sup>びしたいと人を介して申し出があったとのことである。白秋は会わなかった。大正10年、菊子と結婚し、白秋は家庭的な安息を得ることになった。長男隆太郎、長女篁子が生まれている（藪田義雄（1992）pp.157-168）。

なお、白秋は8年間小田原にいたが（写真11）、その後、上京し、谷中、大森、世田谷、砧村、成城、阿佐ヶ谷と転居を重ねている。住居について繊細なところがあったと思われる（藪田義雄（1992）pp.165-166）。



写真 11. 北原白秋旧宅（於小田原市）

白秋は、童謡揺籃期に「雨」（弘田龍太郎作曲）や「ゆりかごの歌」（草川信作曲）などの名曲を作っており、戦後の教科書にも取り上げられている。この「からたちの花」（山田耕筈<sup>(24)</sup>作曲）は、棘のある木を防犯<sup>とげ</sup>のためとして、生垣<sup>いけがき</sup>に使用する家があり、白秋が小学校時代の通学路にあった思い出から、抒情詩が生まれたとされる。オペラ歌手藤原義江が歌い、童謡としてよりも、芸術歌曲として多くの人から評価されていることでも有名である。

### 3-2-4. 三木露風作詞の「赤とんぼ」：（夕やけ小やけの 赤とんぼ）

三木露風（1889-1964）の生家は、龍野城下の元武家屋敷のあった地域に所在した（写真12）。JR姫新線の本竜野駅を下車、タクシーにより揖保川を越えて進むと、鶏龍山に向かって人家が広がっている。露風は、明治22年（1889年）父節次郎と母かたとの長男として生まれた。しかし、両親が離婚したため、露風は祖父の下で育てられた。龍野中学を首席で入学する



写真 12. 三木露風補修中の生家（於たつの市）

も、授業に興味がなく、私立閑谷黌に転学し、詩作に耽<sup>ふけ</sup>っていた。これも中退し、その後詩集「夏姫」を自費出版して上京している。さらに、詩集「廃園」を刊行したが、この作品を永井荷風が激賞したことから、注目されるようになった<sup>(25)</sup>。

友人の勧めもあって、早稲田大学や慶応義塾大学に学んだが、いずれも学費未納のため、除籍されている。しかし、大正期にかけて次々に詩集を発表し、このことが北原白秋と並んで詩壇の双璧と称されるようになった。なお、北海道トラピスト修道院の講師を務めていた時代があり、夫人とともに受洗した。この修道院滞在中に、「赤とんぼ」を作詞している。

戦前には、地方で働き口が見つからない場合に、<sup>つ</sup>伝手を頼って「ねえやさん」として家事手伝いに入る子女がいた。また、その間に良い縁談があると、その家から嫁に行くことも行われていた。「赤とんぼ」の歌詞にもあるように、おそらく露風の家において、よく似た出来事があったのかと思われる。幼児の頃に、「ねえやさん」の世話になった思い出の数々が、詞の中に込められている。

この「赤とんぼ」は、山田耕筰により、昭和2年に作曲された名曲である。昭和23年の国定教科書に収録されたことから、多くの子どもたちに今日まで歌われてきた。

なお、生家は補修工事中であったが、元の地に実在しており、また、「赤とんぼ」の記念碑が近くの公園内に建てられていた（写真 13）。

ところで、露風は親の離婚で少年時代母親がいない生活の中で寂寥感<sup>せきりょうかん</sup>に苛<sup>さいな</sup>まれていたが、この歌の中に自分の想いを、表現を変えて歌っているようにも思われる。なお、実母かたは、離婚後看護婦の道を志し、東京帝国大学病院の看護婦を7年勤務したのち、新聞記者碧川企救男と再婚している。かたは、婦人参政権運



写真 13. 三木露風「赤とんぼ」の歌碑（於たつの市）

動でも活躍するなど、当時としては時代の先を行く人であった。露風は、晩年実母かたの世話に努め、十分に親孝行したことも伝えられている。

### 3-2-5. 巽聖歌作詞の「たきび」：（かきねの かきねの まがりかど）

作詞家の巽聖歌（1905~1973）は、かつて新井薬師にある広大な屋敷の近くに住んでいたことから、「たきび」の歌詞が思い浮かんだという<sup>(26)</sup>。西武新宿線の新井薬師前駅から10分前後の地に童謡「たきび」の作詞された現場がある（写真 14）。都心の中で、これほど大きな敷地にある屋敷も少ないが、ここに植えられている植栽<sup>けやき</sup>にも驚くものがある。櫨の大木が何本もあり、整然とした垣根に囲まれたこの場所は、どのような方がお住まいなのか想いを馳せることになる。巽はこの屋敷での焚火<sup>たきび</sup>を想定して作詞したが、現実にも当時この付近で焚火が行われていたものと思われる。なお、この歌の作曲者は渡辺茂（1912-2002）<sup>(27)</sup>である。



写真 14. 巽聖歌「たきび」の歌われた場所（東京都・新井薬師）



異聖歌は、独学で20歳のころから詩作に励んでいた。「赤い鳥」に投稿した詩が、北原白秋の目に留まり、激賞されて以来白秋門下に入り、詩人として活動することになった。

ところで戦後間もない頃、冬になると近所のガキたちが集い、枯れ木や板切れを持ち寄って、道端で焚火をしたことを思い出す。それぞれの家から、さつま芋を持ってきて、焚火の中で焼き芋を作るのが楽しみの一つであり、子どもにとって大切な行事でもあった。しかし、今では自動車能通过ることや、火を子どもだけで扱うことは許されないことから、こうした光景は見られなくなっている。現在住んでいる地域では、大晦日やお正月などに、参詣者への配慮から、神社境内に焚火が用意されていることがある。

また、一般家庭でも「ダイオキシン」の発生が懸念されることもあり、とくに落葉を集めて庭内でこれらを燃やすことは行われなくなった。桜、松、柿、栗などは、秋から冬になると、落ち葉が激しく隣近所にも迷惑を掛ける。このため毎日のように落ち葉掃除に時間をかけることになる。ただし、現在では一定のサイクルで市の清掃車が巡回し、各家庭の落ち葉などを廃棄処分のため収集してくれる。このような体制が出来上がっていることから、焚火により落葉を処理することは、今では不要となった。

「たきび」は1941年（昭和16年）12月、日本放送協会の子ども向け番組で発表されたが、太平洋戦争の開戦と重なり、その後放送されなくなった。また、当時の軍部は、焚火で無駄に燃料を使うことを禁じていた。さらに、空襲を受けるようになると、敵の目標になるとの指摘もあり、焚火そのものも完全に封じられてしまった。

しかし、戦後、GHQ（General Headquarters：連合国軍最高司令官）の放送担当官の情報から、アメリカで子ども番組として定着している「シンギング・レディ」を参考にして、1949年よりNHKラジオ番組「うたのおばさん」が制作されるようになった。松田トシ・安西愛子が交代で幼児向けの歌とお話をつないで放送したが、この番組で「たきび」は、日の目を見ることになった<sup>(28)</sup>。その後、検定教科書にも掲載されるようになっていく。

「たきび」が作曲された時代から世の中が大きく変化し、この歌の暖かい気持ちを伝え聴くことが次第に困難になっているのは残念なことである。

なお、この歌が生まれる契機となった新井薬師にある邸宅と庭園そのものは、現在も従来通り整然と維持

されており、外観を見ているだけでも誠に素晴らしいものがある。

### 3-2-6. 茶木滋の「めだかの学校」：（めだかの学校は川のなか）

「めだかの学校」が詠まれたとされる場所が小田原にあり、記念碑も残されている（写真15）。現在は、バスの停留所になっており、その背後に荻窪用水の水車がゆっくり廻っている。子どもが感じた「めだか」の生態について、この歌の中に実にほほえましく表現されており、人々の気持ちに訴えるものがある。



写真15. 茶木滋「めだかの学校」歌碑（於小田原市）

茶木滋（1910～1998）は、明治薬学専門学校を卒業して、製薬会社に務めていた。サラリーマン生活の傍ら、童話や童謡を作っていた。戦時中小田原に疎開していた時、子どもが表現しためだかについての感想から、この歌のヒントを得たとのことである<sup>(29)</sup>。なお、中田喜直（1923-2000）<sup>(30)</sup>がこの歌を作曲している。戦後になって、1950年NHKの「幼児の時間 歌のおけいこ」で、安西愛子が歌い、その後、子どもたちに歌われるようになった。

最近ではめだかも少なくなり、かつてのようにその生態を感知することは困難になっている。先ごろ、孫が近くの箕面川で三匹のめだかを掬<sup>すく</sup>ってきたが、珍しいことといえる。人間の生活環境が拡大するとともに、世の中の自然が破壊または影響を受けるようになってきたからである。具体的には、農薬汚染による影響や、川の護岸工事が自然の環境を大きく変化させていることなどが挙げられる。

ところで、自然環境の保護と人間生活とには、明確に線引きできないところがある。たとえば、春先のウグイスの鳴き声にクレームをつける人はいない。ホタルが舞うと小川の辺に人々が集まってくる。一方、カ

ラスのいたずらには苦情を呈する人は多い。こうした事柄をどのようにバランスを採るのか、難しいところがある。

なお、「雀の学校」(清水かつら作詞、弘田龍太郎作曲)と対比して、「めだかの学校」は民主主義の教育理念が反映されているとの解釈がある。前者は大正時代の学校教育の姿勢が表れているとの指摘である。つまり、先生が鞭(むち)を振りながら「チイチイパッパ」と厳しく生徒を指導する時代の歌と、誰が先生か生徒か分からないという時代の教育との対比が、歌詞の中で示されているという意見がある<sup>(31)</sup>。これについて、戦前のようにもっと厳しい指導をすることを求める人もいるが、個人の能力を存分に発揮できる教育を支持する人もいる。双方の相違を比較検討するつもりはないが、少なくともこの歌が詠まれた現場の雰囲気は、今のどか長閑なものがあつた。

## 4. 結びに変えて；子どもの歌をめぐる 歴史の変遷

懐かしい唱歌や童謡について、思い出のある10曲を選んで、歌にまつわる歴史や出来事などをそれぞれ辿ってみた。このことからどのようなことが見出せるのか、以下に整理してみる。

### 4-1. 唱歌の成り立ちとその後

唱歌は、明治時代に入り、近代国家の形成に向けて、欧米並みの学校教育を行うための方針が模索された結果として、生まれたものであった。当時、音楽教育の在り方を調査させるために、文部省は伊澤修二をアメリカに留学させた。彼の帰国後、音楽教育全般の在り方と、教科書の作成、楽器の導入検討などについて、音楽取調掛を設置して当たらせていた。また、アメリカからL.W. メーソン<sup>(32)</sup>を招聘し、初等音楽教育の方向について助言を得ている。こうしたなかで「蝶々」、「蛍の光」、「見わたせば」(むすんでひらいて)などが採用されたが、これらは欧米の曲に、日本語の歌詞をつけて唱歌としたものであった(明治期に作成された唱歌127曲のうち33曲ほどが数えられる(野ばら社(2000)参照)。明治20年には音楽理論と音楽教育を専門的に学ばせるため、音楽取調掛の後継ともみられる東京音楽学校が設立されている。

このような段階を経て、日本人による唱歌が制作されるようになってきた。明治24年には、最初の音楽教科書「小学唱歌集」が文部省から出版された。こう

した唱歌の作成には、伊澤修二のもとに集った東京音楽学校の教授(当初の音楽取調掛を含む)たちや、教育現場で励む教師などが関わっていた(例外として、滝廉太郎は音楽学校恩師より依頼を受けて、官費による留学の前に作曲に携わっていたことになる)。

なお、作詞者・作曲者不詳とする歌が、明治時代だけでも31曲ほどある(野ばら社(2000)参照)。当時の文部省唱歌と銘打って出される場合や、複数の音楽取調掛が関与する場合では、作者の名を伏せる必要があったかと思われる。なお、その後、氏名が明らかになったものもある。たとえば、高野辰之と岡野貞一により作られた名曲「故郷」などは、当初は作詞者・作曲者不詳で発表されたものであった(金田一春彦(2015) p.89 参照)。

ところで、明治20年頃から、東基吉などの提唱により、言文一致唱歌を作る動きがみられた。これに同調する唱歌として、東基吉の妻くめによる幼稚園唱歌「お正月」などが生まれており、この動きの先駆けとなったことは興味深いものがある。

いずれにしても唱歌は、明治以降のメディアのない時代を通して、生徒の全員が歌ったところに、学校教育における重要な意義があったといえよう。多くの子どもたちにとって、忘れることの出来ない歌が多々あったかと思われる。

しかし、日清・日露戦争での勝利や、その後、一層軍国主義時代へと進んだことから、唱歌にもこの時代を反映したものが取り込まれた(「水師営に会見」、「二宮金次郎」などを含む)。その中には、軍神を讃える歌、忠君を讃える歌、武将の物語、軍国時代の手本となる歌などがあつた。太平洋戦争の終戦とともに、こうした歌は教科書から削除されたが、改めて評価し直しても良いテーマもあるように思う。

### 4-2. 童謡に取り組んだ人々

大正時代になって、子どもの歌う唱歌について、これでよいのかという議論がなされるようになった。一定の方向に子どもたちを引っ張っていく、教条主義的な唱歌の在り方に異論が出てきた。情緒や情操教育の必要性を説く音楽家や文学者による「童謡運動」が生まれて、鈴木三重吉の創刊した「赤い鳥」に、童謡の詩が発表されるようになった。この運動が、童謡を子どもたちに広げる契機となり、西條八十(作詞)と成田為三(作曲)による「かなりや」は、童謡詩に曲が付いた最初のものとなった。以降、次々に童謡の名曲が生まれて、今日まで歌い継がれるものが多数出てき



た。なお、童謡は、唱歌と異なり、歌われるものと、見向きもされないものがあり、広く人々から取捨選択される状況が生まれている。

この時代の有名な童謡詩人には、西條八十、北原白秋、野口雨情が挙げられる。彼らは三大童謡詩人として高い評価を得たが、いずれも早稲田で学ぶ時期があったことは興味深い。坪内逍遙や島村抱月といった文学史上偉大な功績を残した人たちの指導や影響もあったかと思われる。

しかし、この三人は、名声を得るまで経済的に苦労があった。西條は父の家業が行き詰まり、家族を支えねばならぬ苦しい時代があった。白秋は、近所の火災の影響を受けて、親が経営する郷里の酒造会社を閉じねばならなかった。雨情は、父の経営する企業の借財に苦しんでいる。この三人に加えて、露風は両親の離婚により、祖父の支援を得ていたが、勉学のため友人や知人の援助を受けたが資力に限界があった。早稲田大学などを中退したが、その後トラビスト修道院の講師を務めるなど生活の安定を図りながら、詩作に励んだ時代があった。

このようにみえてくると、童謡運動に当初関った人たちは、生活基盤が不安定で、先の見えない状況の中から、詩作を通じて這い上がろうとしている人たちであった。また、優れた作曲家の支援があったことも忘れることのできないポイントといえる。

なお、唱歌に関った人々は、文部省の役人や学校教育者といった当時の体制社会に属する人たちといえた。このところが、双方に関っていた人たちの意識に、大なり小なり相違があったかと思われる。つまり、唱歌は、教育を念頭に置いた歌により、子どもたちを一定の枠の中に押し込むという印象を与えていた。一方、童謡は、子どもの自由な心を大切にしたい願いが込められており、両者に根本的な対立があったかと思われる。

なお、戦時中に詩作に励んだ異聖歌は、太平洋戦争の勃発により、発表の場を失い戦後になって日の目を見るようになった。また、茶木潔は、空襲から逃れるため疎開していたが、この時の経験が、戦後になって活かされることになった。戦争が童謡に大きな影響を与えていた時期があったが、これらの歌についても、その事例といえる。

#### 4-3. 戦後の唱歌・童謡をめぐる現代的様相

太平洋戦争の終戦とともに、従来の教科は解組され、軍国主義の時代に求められていた作品は、いずれも教科書から戦後削除された。一方、高野辰之・岡野貞一

コンビの作品などは、その後の教科書にも引き続き採用されている。また、童謡の名曲も戦後の教科書に多数採用されることになった。しかし、童謡にも戦時体制の中で、それに迎合した作品があり、これらは戦後歌われなくなった。ただし、優れた歌には、歌詞の文言を、時代に沿うように改められて、その後歌われているものもある。たとえば、「里の秋」（斎藤信夫作詞、海沼實作曲）がある。

なお、戦時中から戦後にかけて、ラジオにより童謡少女歌手が活躍し、多くのファンを得た時期があった。また、「音羽ゆりかご会」などの活動も知られたところである。童謡歌手として、川田正子、川田孝子、古賀さと子、小鳩くるみ、伴久美子、松島トモ子などの名は、当時の子どもたちはみんな知っていた。しかし、戦後のNHKラジオ番組において、正統派歌手が歌う番組が家庭での人気番組となり、次第に童謡歌手に取って代わるようになった。また、美空ひばりの登場が世間の評判となり、子どもが歌うのは唱歌や童謡であるという従来からの考えが改まるようになった。つまり、戦後、子どもが大人の歌謡曲を歌うようになり、世の中は大きく変化するようになってきたといえる。

本稿は、筆者が子どものときに歌っていた唱歌・童謡のなかで、忘れられない曲を取り上げ、その創作過程やその歴史的意味合いを辿ってみたものである。我が国の音楽教育の発展過程、童謡運動、戦争時代の影響、敗戦からの復興と民主化などと、それぞれの作品には、密接な関係があるといえる。個々の歌の形成過程を辿ることから、時代の流れや文化との関係を読み取ることが出来よう。さらに、歌の創作活動に取り組んだ人々の生活や苦労を紐解くとき、それぞれの作品に切実な願いや想いが込められており、今もなお人々の心に訴えるものがあるといえる。

本稿で扱った唱歌・童謡など、その存在さえ忘れられかけている今日において、改めて振り返ってみることも意義のあることと考える。また、若い学生においては、古い唱歌や一部の童謡などは、知らないことが多いはずである。こうした意味から歴史の一端を理解してもらうためにも、伝えておきたいと思う。

### 謝辞

成田研一（元環境庁国立公園レインジャー）、野畑康（元ダイヘン環境管理部長）、栗本征彦（友人）、中野寛成（元国家公安委員会委員長・元音楽議員連盟会

長)、小東一寛(知人)、古賀紀昭(元奈良県不動産鑑定協会会長)、浅葉正美(元大和銀行システム部部长代理)、大澤茂男(大阪青山大学副学長)、松平満子様各位から貴重な意見を頂きました。感謝申し上げます。

また、長岡智寿子(田園調布学園大学准教授)、長岡健壽(サントリー食品インターナショナル(株) MONOZUKURI 本部 品質保証部 部長)・みゆき、妻宣子の助力を得た。記して謝す。

## 注

- (1) 伊澤修二(1851-1917)現長野県伊那市高遠市出身。  
 明治2年 中浜万次郎に英語を学ぶ。  
 明治3年 大学南校(東京大学の前身)に入学。  
 明治7年 愛知県師範学校校長。  
 明治8年 アメリカへ留学。  
 明治11年 帰国。文部省所属。  
 明治12年 文部省内に音楽取調掛創設。  
 明治13年 L.W. メーソンを日本に招聘。  
 明治14年 小学唱歌集発行。  
 明治20年 東京音楽学校(旧音楽取調掛)創立。  
 明治32年 東京高等師範学校校長。  
 大正6年 脳出血により死去。  
 松村直行(2019)p.37-39 参照。
- (2) 熊野地方史研究会(1997)熊野誌一第43号東基吉・東くめ特集号 pp.1-36. 参照。
- (3) 熊野地方史研究会(1997)編上笙一郎 p.3 参照。
- (4) 文部省では、唱歌編集や教材として楽器の選定など音楽教育の在り方を進める委員を任命していた。音楽取調掛として、作詞委員は芳賀矢一、上田万年、尾上柴舟、佐々木信綱、吉丸一昌、高野辰之など8名。作曲委員は上真行、小山作之助、田村虎蔵、岡野貞一など8名であった(金田一春彦(2015)p.92 参照)。
- (5) 岡野貞一は、東京音楽学校卒。後に同校教授。尋常小学校唱歌の文部省編纂委員として作曲を担当していた。多くの唱歌以外に、校歌も多数作曲している。たとえば、梅花学園校歌(清水千代作詞)、北野中学(現高校)校歌(土井晩翠作詞)などがある。
- (6) ヨーロッパで人気のある合唱チーム。四名からなるメンバーの国籍は、スペイン、アメリカ、フランス、スイスとそれぞれ異なる。日本でも演奏会を行って好評を得ている。  
 なお、記念CDにも「故郷」が歌われている。
- (7) 竹内喜久雄(2017) pp.66-67. 参照。
- (8) 島崎藤村(1989)pp.250-255. と、猪瀬直樹(1994) pp.19-21. を参照されたい。また、読売新聞文化部(1999)pp.175-176. においても、この経緯について、的確に整理されている。
- (9) 古川薫(1996)p.242 参照。二百三高地は、標高が203メートルにちなんで、日本軍が付けた名前と記している。
- (10) 渡辺淳一(1988)p.361. において、旅順近辺の地図が記されている。旅順を取り巻く戦場となった場所が理解できる。
- (11) 三戸岡道夫(2009)pp.524-525. 参照。
- (12) 岡田良一郎(1839-1915)は、実業家、政治家、衆議院議員。長男岡田良平(1864-1923)は、元京都帝国大学総長、元文部大臣。次男一木喜徳郎は宮内大臣になっている。
- (13) 長澤源夫(2012)p.144 参照。
- (14) 大江市松は神戸の実業家であり、二宮金次郎の教えを受けて、1911年報徳学園の前身を設立した。嫡孫の二宮尊親を校長に迎えたこともある。
- (15) 成田為三は、秋田師範卒、東京音楽学校卒。国立音楽学校教授を歴任。「かなりや」以外に、「浜辺の歌」、「赤い鳥小鳥」、「りすりすこりす」などを作曲した。
- (16) 矢崎節夫編(2015)pp.78-80. 参照。西條八十と面会した様子が記されている。下関駅での数分の面会であった。
- (17) 矢崎節夫編(2015) pp.115-116. 参照。みすゞと上山文英堂の手代の男との結婚が、進められていたが、弟の雅輔は、この結婚に反対を表明していた。また、松本侑子(2017)pp.178-206. においても、雅輔がみすゞの結婚について、反対していたことが、詳しく触れられている。
- (18) 吉川潮(2011)pp.44-45. 参照。西條は、生活を支えるために、詩を書くことが出来なかった。詞を書くことのできない詩人など、どうしようもない。しかし、一方では、これを弁護する自分があり、悶々としていた時期があった。しかし、鈴木三重吉の手引きにより、発表の場が与えられて、創作活動が可能となった。歌を忘れたかなりやも、環境を整えれば忘れていた歌を思い出さだろうとの思いを込めた歌であった。
- (19) 野口不二子(2014)pp.23-25. 参照。野口家の素性が、楠木正成の弟正季に端を発していると記している。興味深いものがある。



- (20) 野口不二子 (2014)pp.136-142. 赤い靴を履いていた女の子の足取りを調査した人がおり、主人公は、結核でアメリカに渡れず、日本で亡くなっていたと記されている。なお、この当時、従兄弟もアメリカへ渡ったことから、イメージが重なっているのではないかとみられている。
- (21) 野口不二子 (2014)pp.71-73. 参照。
- (22) 中山晋平は、東京音楽学校卒。島村抱月の書生となり、勉強をしていたが、松井須磨子の歌う曲作りを、島村から依頼されて作曲したのが、「カチュウシャの唄」としてヒットした。「船頭小唄」、「ゴンドラの唄」、「さすらいの歌」と次々にヒット曲を出した。その後童謡においても、数々のヒット曲を出している。
- (23) 北原白秋記念財団 (2016)pp.24-26. 参照。北原白秋は、与謝野寛、吉井勇、木下杢太郎、平野万里の五人で、九州を旅している。この旅行で、キリシタン遺跡を訪ねたことから南蛮文学に取り組む契機となった。
- (24) 山田耕筰 (1886-1965) 東京音楽学校卒。ドイツにも留学し、クラシック音楽について学んでいた。童謡についても、北原白秋、三木露風と組んで、名曲を数々出している。
- (25) 財団法人霞城館 (2007)pp.10-12. 参照。
- (26) 竹内喜久雄 (2017)pp.168-169. 参照。NHK のうたのおけいこという番組で、新作童謡として 1941 年 12 月 9 日から三日間放送予定であった。しかし、前日真珠湾攻撃により、太平洋戦争が開始された。このため、この歌の放送も中止となった。戦後になって、この歌の放送が再開され、検定教科書にも掲載されるようになった。
- (27) 渡辺茂は、小学校教員など教育者であり、童謡作曲家として活躍した。まどみちお作詞「ふしぎなポケット」の作曲をしている。
- (28) 井上英二 (2018)pp.214-215. 参照。
- (29) 竹内喜久雄 (2017)pp.206-207. 参照。
- (30) 中田喜直は、父中田章の三男で、東京音楽学校卒の作曲家。「夏の思い出」、「小さい秋みつけた」、「雪の降るまちお」などの作曲をしている。
- (31) 読売新聞文化部 (1999)pp.18-21. 参照。
- (32) メーソン (Luther Whiting Mason. 1818-1896) 明治 9 年伊澤修二の進言により、明治政府はメーソンを日本に招き、唱歌教育などに貢献した。音楽取調掛で音楽理論の説明、楽器の演奏の範を示すなど、近代音楽の導入に活動した。松村直行 (2019)

p.36-37 参照。

## 参考文献

- 1) 芥川龍之介・音楽の旅・旺文社、1981.
- 2) 五木寛之・歌の旅びと・東日本・北陸編・集英社文庫、2019.
- 3) 五木寛之・歌の旅びと・西日本・沖縄編・集英社文庫、2019.
- 4) 井手口彰典・童謡の百年・筑摩書房、2018.
- 5) 井上英二・童謡百年史 童謡歌手がいた時代・論創社、2018.
- 6) 猪瀬直樹・唱歌誕生・文春文庫、1994.
- 7) 宇津木三郎・二宮尊徳とその弟子たち・夢工房、2011.
- 8) 霞城館・三木露風・たつの市、2007.
- 9) 金田一春彦・童謡・唱歌の世界・講談社学術文庫、2015.
- 10) 川崎洋・大人のための 歌の教科書・いそっぷ社、2004.
- 11) 北原白秋生家記念財団、西日本新聞社ほか・北原白秋・北原白秋生家・記念館、2016.
- 12) 日下公人・戦前の教科書・祥伝社、2013.
- 13) 暮らしの手帳編・戦中・戦後の暮らしの記録・暮らしの手帳社、2018.
- 14) 合田道人・本当は戦争の歌だった 童謡の謎・祥伝社、2005.
- 15) 児玉幸多・人間と大地との対話 日本の名著 26 二宮尊徳 pp.5-50. 中央公論社、1970.
- 16) 小松原優・童謡のふるさと・関東図書、1999.
- 17) 今野真二・北原白秋言葉の魔術師・岩波新書、2017.
- 18) 阪田寛夫・まどさん・新潮社、1985.
- 19) 阪田寛夫・童謡出てこい・河出書房新社、1986.
- 20) 司馬遼太郎・坂の上の雲 五・文春文庫、1990.
- 21) 島崎藤村・破戒・岩波文庫、1989.
- 22) 竹内喜久雄・唱歌・童謡 120 の真実・Yamaha music media corp. 2017.
- 23) たつの市立龍野歴史文化資料館編・トンボの文化史・龍野文化伝承会、2014.
- 24) たつの市立龍野歴史文化資料館編・たつのと赤トンボ・龍野文化伝承会、2015.
- 25) 辻田真佐憲・日本の軍歌 国民的音楽の歴史・幻冬舎新書、2014.
- 26) 長澤源夫・二宮金次郎の言葉と仕事・じっぴコン

- パクト新書, 2012. 院.
- 27) 中村幸弘編. よんでたのしい 日本の童謡. 右文書院, 2008.
- 28) 野口不二子. 野口雨情伝. 講談社, 2014.
- 29) 野ばら社編集部. 唱歌. 野ばら社, 2000.
- 30) 古川薫. 軍神. 角川書店, 1996.
- 31) 松村直行. 童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ. 和泉書院, 2019.
- 32) 松本侑子. みすずと雅輔. 新潮社, 2017.
- 33) 三戸岡道夫. 二宮金次郎の一生. 栄光出版社, 2009.
- 34) 武者小路実篤. 二宮尊徳. 薔書房, 2010.
- 35) 矢崎節夫編. 金子みすゞ. 平凡社, 2015.
- 36) 薮田義雄. 随筆 北原白秋. 小田原市立図書館編, 1992.
- 37) 山住正己. 子どもの歌を語る一唱歌と童謡一. 岩波新書, 1994.
- 38) 横田憲一郎. 教科書から消えた唱歌・童謡. 扶桑社, 2004.
- 39) 吉川潮. 流行歌 西條八十物語. ちくま文庫, 2011.
- 40) 吉村昭. 海の史劇. 新潮文庫, 1990.
- 41) 読売新聞文化部. 唱歌・童謡ものがたり. 岩波書店, 1999.
- 42) 読売新聞文化部. 愛唱歌ものがたり. 岩波書店, 2003.
- 43) 和田登. 唄の旅人 中山晋平. 岩波書店, 2010.
- 44) 渡辺淳一. 静寂の声 乃木希典夫妻の生涯 上・下. 文藝春秋, 1988.
- 45) 渡辺裕. 歌う国民. 中央公論新社, 2010.

## その他の資料

- 1) 上笙一郎, 山崎朋子. 日本の幼稚園幼児教育の歴史. 理論社, 1978.
- 2) 月刊グッドラックとやま 6月号. 荒城の月のモデルは水の都・富山だ!, 2019.6.
- 3) 熊野地方史研究会. 熊野誌一第43号 東基吉・東くめ特集号, 1997.
- 4) 糺矢祐治. 明治・大正・昭和の童謡・唱歌・抒情歌. 2008.
- 5) 糺矢祐治. 同上 続編. 2011.
- 6) JR 西日本. 文人・偉人たちの北陸 滝廉太郎. 西Navi 北陸11月号, 2018.
- 7) みんなのうた編集委員会. みんなのうた. 光文書